

日本文学の魅力に迫る

～日本三大随筆を読む 「方丈記・徒然草」編～

第2回目：方丈記2

講師：現代歌人集会 理事長 林 和清先生

日時：5月26日（月） 10:00～11:50

① 養和の飢饉

養和元年（1181）に発生した大飢饉

農作物の収穫量が激減、飢饉に落ちいった。大量の餓死者の発生、土地を放棄する農民が多数発生した。地域社会が崩壊し、混乱は全国的に波及した。

② 元暦の大震災（1185）

現代訳で“またおなじころであつたろうか。すさまじい大地震が起こり、大地が激しく動くことがあつた。その光景は、尋常でない。山は崩れて河川を埋め、海は傾いて陸地を浸した。”

③ 鴨長明 自身についての記述

私は若いころ、父方の祖母の家を受け継いで、長らくその場所に住んでいた。その後、縁が切れ、身は落ちぶれて思いを寄せる方々も多かったけれど、とうとう家を持ち続けることができなかった。30歳過ぎにして新たに自分の考えで一軒の小さい家を建てた。この家を、以前の住まいと比べると十分の一である。自分が住む建物だけを構えて、ちゃんとした家を建てる必要はない。加茂川の河原に近いので、水難の程度も大きく、盗賊の恐れも多い。総じて、生きづらい世の中をじっと耐え忍んで過ごし続けて、心を悩ませたこと、30年あまりである。その間、事あるごとに思い通りにならない人生、自然とつたない運命を悟ってしまった。そういうわけで、50歳の春を迎えて家を出て、世を捨てた。ずっと前から妻も子もいなかったのに、捨てがたいと思う身寄りもない。身に肩書きも給与もなく何に対して執着心を残そうか。

☆

後鳥羽院は、鴨長明の和歌所寄人としての熱心な働きを見て、欠員が生じた下鴨神社摂社の禰宜に推した。河合社の禰宜は、将来下鴨社本社の禰宜となるためのルートであった。父・長継もその道をたどって正禰宜となった。ようやく機会が回ってきた 父の跡が継げる胸躍る長明！ しかし同族の横やりで願いは叶わなかった。

